京
50
337
別圖
56
(28)
21

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

宇治

宇治

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

扣ヲ右ニ切ニ跡ヘ二足ヒラキヒライタナリニ右ニテチヨツトヨタヘテ上ヲ見テ三足程シヅカニ正ヘ出テ夫ヨリツカツカト早足ニ出足トメ

●それはあさかの山影さへ見ゆる

足トメ下タヲ見井ノ内ヲノゾク心下タヲ見ナガラ左ヘヒラキ

山の井のあさくは人を思ふものかは

面直シ左廻リ

角ニテ正向キ扇右ヘ上ヘカザシ

●さらぬだにかざしとあ[illegible]

カザシトサシ頭ヲヘカザシナリニフセルコヽロ心持内ヘトルカザシタ右ノヒヂヲヒルハアシヽ

扇前ヘ出シ横ニシテ盃ウケタルヤウニシテ左ノ手ヲツヽヘ二三足出

●御遊の[illegible]

左リ上ヲ見此見様腹ヨリ見ル持タル扇ノ方ヘ氣ノヌケヌ様ニエタカニノゾクヤウナルハアシヽ足ツカイハ左ヲヒキ右ヲフミヒラキテモ又右ヘ左ヲヒケテモ又左ヲヒチリ右ヘフミヒラキテモ

有明の月[illegible]

舞臺ノ中正面ヲサシ高ク見

●大内様を頼み この山の井も

此見様舞臺ノ右ノ方ニヨリテヨルエヘ右ヲカケテサシ左ノ方ヲ見ル夫テ中通リヲ見ルニテ図面

へ猿沢の[illegible]とも

[illegible]

ありがたや弘法流布の[illegible]

霊鷲山にして妙法華経を説き給ふ

今は衆生を度せんとて大明神と

現じ此山に[illegible]霊鷲の山を[illegible]

三笠の山と[illegible]

木陰も[illegible]

[illegible]春日[illegible]山の[illegible]

[illegible]春の[illegible]

猿沢の池の[illegible]

[illegible]名池[illegible]

[illegible]宮居[illegible]社[illegible]

の池[illegible]

[illegible]

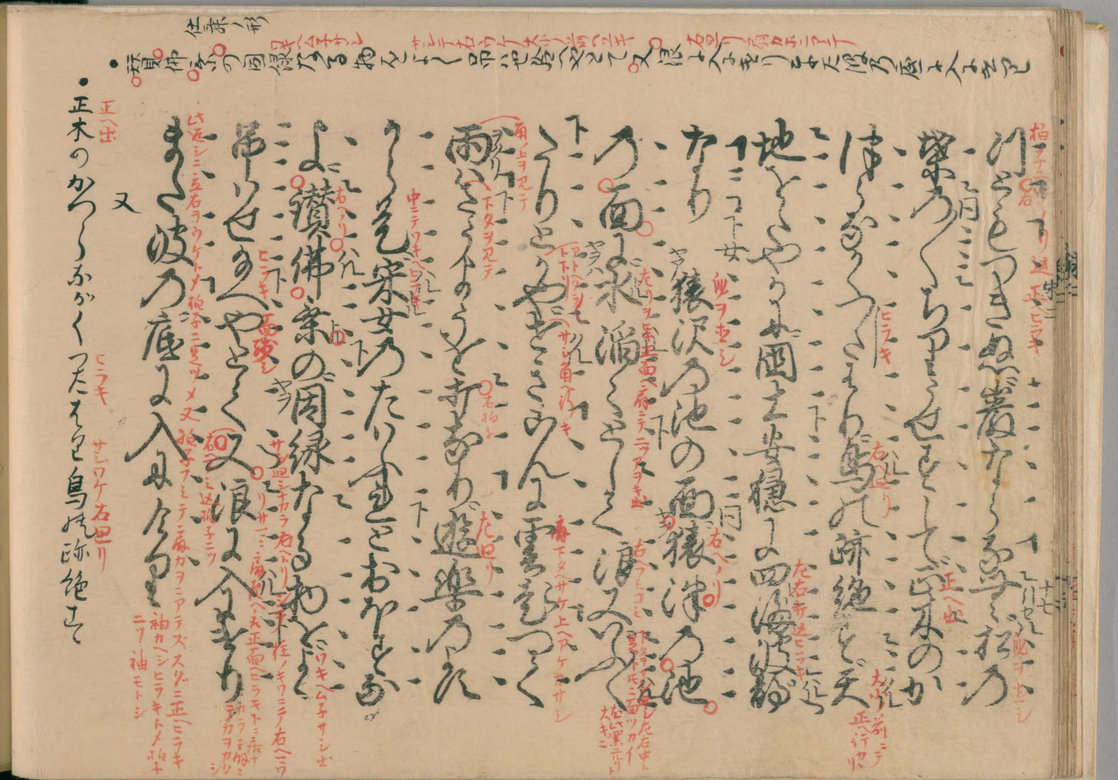
是ハ当社の御神ひかりの御誓ハ
あまねき衆生の一葉もらさじを
そなへてや衣の袖の情に手向
ゆふしでかけつゝひたすらに来れ給ふ深
きまことの人なれバみのりの法に従ひて
なり給ふ慈悲萬行の月ハ自性の三
空ハ山の高きくもらぬ雲居まで
月のかげわくるかたも清く澄み給ふ
張かけておもひしり世を照らす
もろこしの本国土成仏の律の常ハ
ここにいたりて
あさましやおもひおもひそ　あきらかなる
もろもろの仏のいまする国ハ人の方にあらはれ
こゝろのみちもわかず隔てなき香

あら有難の弘法流布の砌とて　首を
是よりも山にして妙法蓮華経をあらはし
そもそも八百万の神々のなかにも大明神と
現れ給ひし山の住人の鳳凰の巣をつくり
三世の山を治めし梅花枳樹の
木陰も色なる松の花
ところも高野山の深き長閑さ　深山の峯まで
春の花をもみじや花の時
深き池の水の汲むとも尽きせぬ
流れを汲みて池の
流れを数へて池の社さへ
の池も其の名を子細あらはれ池の流れ
くれ竹もとより経を写して流れを

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

燕子花



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

杜若

装束之雲

シテ　着甘掛箔　腰巻縫箔　腰帯　小面
髪長　同帯　扇　上着唐織
後ニ長絹　ウイカムリ　ヲイカケ唐織ヌク

一ノ着流女（ワキ坐ヘ行トキヨビカケ出シテ名ノリ）右ヲウケワキヲ見

舞附

あふ〳〵此僧仕〳〵ふまた浅からぬ身（ワキ）なれや都の空を（ワキ身ヲ直シ出）見ん諸国一見の春なれば杜若も面白う候あら急候はう〳〵と（サシ）三河の国八橋とて（ワキハムク）花も名所なるかきつばたさて杜若（ワキハムク）とは（ワキ正面ヘ直ス）何れの花にて候ぞ（シテ）いつとしも

こもり（ワキ）なき花の色かな（シテ）ありしにもあらぬ（ワキハムク）すがたかな（シテ）都の空を（ワキ）思ひやり（シテ）旅人（ワキ）西の（シテ早足身ヲナヨシ出ル）方ぶく（ワキ）なる八橋の（シテ）杜若（ワキ）名所ぶりも（シテ）語るなり（ワキ）いつとしも

ワキヲミテ見ル　ウケヲミテ見ル　此辺ヨリ謡ノ間ニ扇ヲ使フ　カタノ如ク行ヒ行ヒテ　ハタラキ舞ヒ　ヲロシ扇ヲ持チ直ス　ヲロシ扇ヲ持チ直ス　ヲロシ扇ヲ持チ直ス

しかも八ツ節 はる〳〵きぬる旅をしぞ
思ふと詠みし [ワキヘムク] 其心なり これなる杜若
和歌讀し所なり [ワキ先 正面ヘムク] 何とおもしろや
扨はこの杜若の園も まだとも
業平は いかで見しかなと [サ節] [ワキヘムク] 事問ひて
しき問ふる此八橋のことを疑ひも
んなき男深きなどくのこちかす [セ]
くら [ワキ先 正面ヘムク] 園を過ぎ 其の新しき取りこ
んなる事なりけり [サ] 思ひ渡るし八
橋の [ワキ] 只何か消れ杜若 [サ] 八橋
くきぬる旅をしぞ [ワキ] 思ひのいろ
我世のこしてさ [サ] [ワキヘムク] 言はむかし それ
ありしかなれども [ワキ] 其王家の花は

物着 後見坐ヘハシリテ長絹冠着唐織ヌク
物着スミ出ル時左廻リニテ柱ノサキヘ
出ワキヘ向キ あふ〳〵 ト謡フ

おこなふ [二足ツメル 上音 正面ヘムク] 在原の記を顕はすかき
つまろし〳〵 沢 [右ヘウケ] 在るは淺き
沢に契りし人も八橋のくもでの [ヒラキ]
掛き思ひを [ワキヘチヨト向] かけて旅人の [左廻リ] むかしをと
見る沢の [シテ柱ノキハニテ正面ヘムク] 杜若名の飛鳥にて列ぬる仏かな
[カヘシニワキヘムク サ節] く いかなる雲の花 [ワキ] 何事
つき 見給はし [サ] 見し給いし従へ [ワキ] をりもはらう
華に 一夜の明しかへ [ワキ] 何の様
しや庵りて乗りかへし [物着 サ] あふ〳〵
其冠 唐衣も身に召して [ワキ] [正面ヘムク] 娘さや
か職しき志川のかしとういろも
かく唐衣ひききすひかしもれ冠の
花しき見なこれはこの杜若もいかなる

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

幸かくいはゝ（ワキハムク）　是社この物かたり（あり）
しかる時に高き石の出でゝそこ（正面ハムク）
又こゝに冠（ワキハムク）業ふかき豊なれあり（ワキ向）
高き舞のありあり神の形見の冠
高き衣（二足ツメル）着（ワキ）給へり（正面ハムク）冠（ワキ）
きるものすれ〳〵ゑ（ワキハムク）ゆるいる
ほくゝゝ（ワキハムク）満ち給ふ（ワキ）
植ゑしむらし花ゆゑ
そみしも世のうきほだしなりし
謂のうち（正面ハムク）又業ふかき極おもい
歌舞の菩薩の化現なれ讀ゝ
わうのうの業ふかも諸法実証の如
又なれい此ゝあるべし（ワキ）

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

佛果（ワキハムク）の縁をそふ〳〵（ワキ）
ゆるりあり（ワキ）是（正面ハムク）
ふ寄特ふ（ワキ）
証とうふ法の声（ワキ）佛事をなす
やあるふまのむらし男花舞の
ゆゑ（ワキ）
そう列うの菩薩の（ワキ）かうふ衆
生と業平（ワキ）市北嵯峨の都
出ゝ（ワキハムク）
着く海原（ワキ）利生の（二足ツメル）
声（ワキ）
向正面ハムク
そふ〳〵（カヽニヲ少出ヒラキ）
あり〳〵（地次第ニテヨトクロギ）
きり〳〵
正面向
や（ワキ）
舞（ワキ）をうちもん〳〵（ワキ上）
あもい
語ふらう〳〵ふのう〳〵（ワキ）
ゑ（地）神を（ワキ）
ひラキ
うさもや（ワキ上）（中ノ出立ヲル）
柳ふ如語いいうの
人ふ何事ふうもう〳〵思ひの袖花
志のふ山ゑいてるふ跡花の姫も

◀四ノ段ノ地ノ終リ花ヲ見テ行ク向ヒノ大小前ニテ舞ノ拵ヒニテ

かく絶えもなし サシ女上 昔男の初冠

して奈良の京春日の里にしるよし

してかりにゆきしに 下日 仁明天皇

の御宇かとよいともかしこき勅を

うけて大内山の春霞たつや弥生の

はじめつかた春日の祭の勅使として

すき額の冠をゆるさるゝ 下女 君の

恵みの深き故殿上にての元服の

事当時其例まれなる故に ワキヘムク

初冠とは申すとかや 然れども世の中

の一度はさかへ一度はおとろふる理

正面ヘ出ル 左 の誠なりける身のゆくへ ヒラキ すみ所 左ノ方ヘ出 もとむとて

東の方に 右ノ方ヘ行カゝリ上ヲ見 行雲の伊勢

上ヲ見 煙ヲミル形ノ心モチ 立波を見て 日吉

サシ廻シ や尾張の海づら ヒラキ に立浪を見て 角ヘ行

いとゞしく過にし方の恋しきに 角取

左ヘ廻リ うらやましくもかへる浪かなと 太鼓ノ前ニテ正面ヘヒラキ

うちながめゆけば信濃なる 上ヲ見 浅間の嶽に立煙 打込

をちこち人の見やはとがめぬと 上女 上ノ扇

口ずさみ猶はる／＼の旅衣 日 大左右ニテ出

三河の国に着しかば 左 ここぞ名にある八橋の沢辺に

匂ふ杜若 打込ヒラキ 花紫のゆかりなれば 身ヲカヘ 妻しあるやと

テ出ヒラキ 思ひぞ出る都人 サシ廻シヒラキ 然るに此物語 ミテ柱ノキハニテワキヘムキサシヒラキ

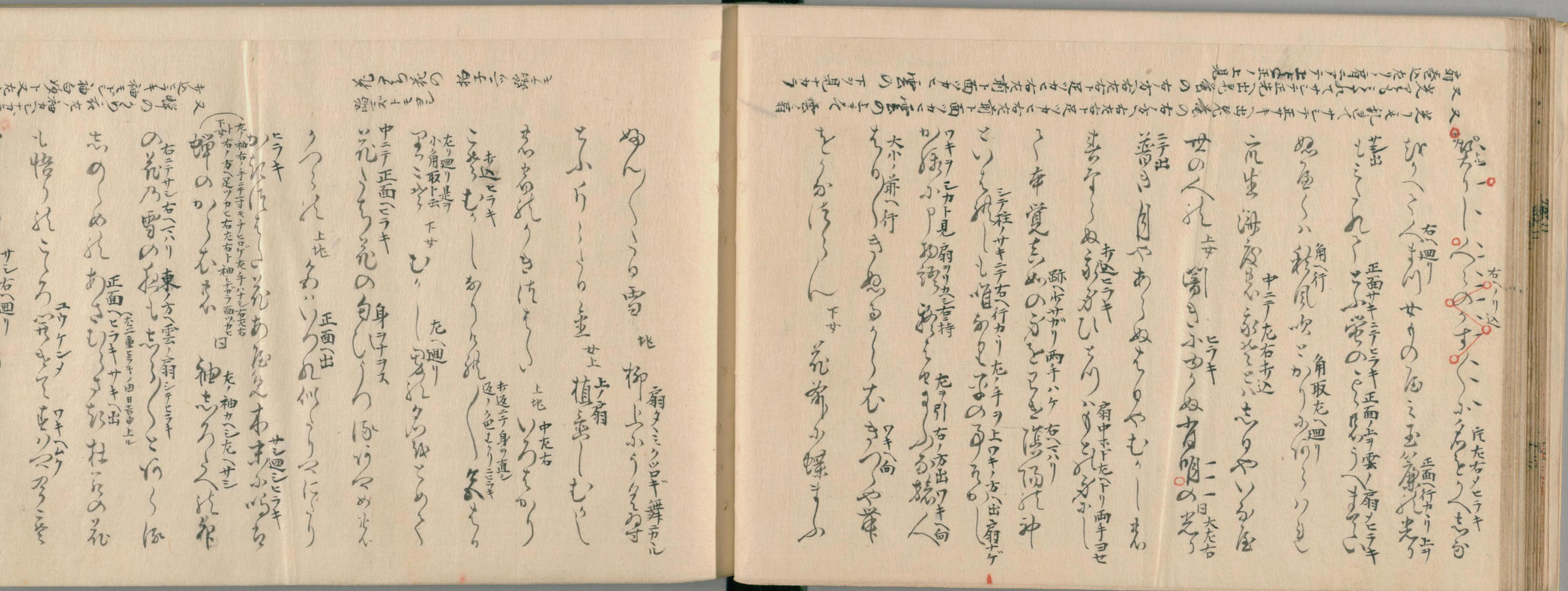
右ヘ廻リ 其品多き事ながら とりわき此八橋や 打切ノ内ニ正ヘ直シ左ニ近ヘカケテ正ヘ今足出サズアトヘヒラキ

三河の水の底ひなく 契りし人の数々に

正面ヘ出 名を変へ品を変へて 人待つ女物病み ヒラキ

玉簾の光も乱れ 左ヲ引 かく

都人、左ヘ行キテ此物語ノ通リニテハヒラキ二度アル様ニ見ルナリ



土恵皆成佛乃御法をうくこそ失　シテ柱ノキハニテ正面ヘヒラキ左ノ袖カヘシ
一○メ拍子フミ入
一○ 少ゝ廻り

附ニハアレ𪜈コヽニ委敷記ス

●まみえおもそ ヒラキ 東路の 左リ右ト五ツ
足ニ行雲ト出ル足ツカヒ 左右 右右左 左左

●うくしの杜若やう 切幕上ル ●あめく 切幕ノ内ニテ足ヲトメワキヘ向謡フ ●是ぞ諸国 身ヲ直シ出ル ●さたりかぶ 橋カヽリ長ケレバ出ル 短ケレバ舞臺ヘ入故正面 ●あかおかぶ 橋がゝり長短ニカヽハラズワキヘ向 ●いろもひさしかぶ 橋カヽリ長短ニカヽハラズ正面 ●こゝろある 橋懸長短ニカヽハラズワキヘ向 ●冬さとの河 橋掛り長ケレハ出ル短ケレハ正面 ●伊勢おほうかぶ 橋掛り長ケレハ出ル短ケレハワキヘ向 ●紀有まつ春の 橋掛り長ケレハ出 短ケレハ正面 ●是ぞ在原乃橋掛り長ケレバ 是も舞臺ヘ入ル 短ケレハワキヘ向

●文をのりても音なりけれ
コノ処東北ナドニハ二ツ拍子フメ𪜈杜若ニハフマザル由市十郎申上ル

杜若

装束之覚

面 小面 深井　唐織　襟 白　着附 箔スリ

腰巻 縫箔　腰帯 縫　長絹 紫

冠 エイ ツイカケ　扇子 ツマ紅　カツラ帯

女ノ舞三段ヲロシ

●三段ヲロシ融雲林院等ハ右ノ手上ケテ袖モ掛ケ𪜈女ユヘモカズ袖カブル

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

なりまする杜若のいと面白く淡紅
思ふを持る人杜若と名五つの字を句
の上に置て旅（ワキへ）の心をよめといひ
ければ（正直シ）唐衣きつつなれにしつましを
あれば（ワキへ）はるばる来ぬる旅をしぞ
思ふ（ワキへムク）とよめる業平の杜若
をよめるにて（正面へムク）面白や扨
は東のことなれば業平

（ワキへ）とは申されまじ（ワキへムク）とよめる
ことのよしなり（ワキへムク）とよめる
同事なれ共八橋のみのうち数しも心の変
りたる面白くのこと（正面へムク）也
扨八橋の古事心の残りて
思ひ（ワキへムク）とよめる業平の
杜若（ワキへ）をよめる旅人
うき（ワキへ）思ひの多き世ぶのこと
（ワキへムク）とは申されまじ（ワキへムク）
とよめる業平の在原

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

花ハ　シテ　二足ツメル　立ち出　正面ムク　立ち
とるべくそゝめきつゝ　右ヲウケ　次第の
ゑもん浅くらに　正面ヘ直ニ出　勢ひしゝも八そしの
くるくるにおを巻もるく　ヒラキ　ワキハシテヨト向
旅人なむやしを　左ヘ廻リ　流るゝものゝ
やうて別ぬる心ゝ　シテ柱ノキワニテ正面ムク　カヘシワキハムク
いるよゝきのゝ　シテ　何ゝまくるゝ
又ゝおかへさらぬ席すて　シテ　一ぬ
ゆしく　ワキ　若松やおてまりし
へ　後見座ヘムク　ロキ物着　シテ　シテ柱ノサキヘ出　ワキハムキ調
ゐるく　ロ　若年寄
流くへ　ワキ　正面ムク　うまやる後しき
うとゝうものかやくをさゝきて
ひとしの箱を差しそへて
ふ先ハそもいふものにくゝそ
是ことはらこに海のうち　シテ　ワキヘムク
ゑの名れゝ　正面ムク　ゑゝ

業平の豊乃あり乃五条の
妻妓乃あるを思ハ形見(ワキノ向)の冠唐
衣身にそへ拾てまゐり(ツレ二人ツメル)ヲ冠(正面ノムク)
き思ハ先こと並ぬ袖乃ぬれハいか
ゝ(ワキノムク)ニテ誠ハ赤ハ杜若の精と
植をき〳〵昔乃客の杜若と
染しも女の杜乃に成し神の詞と
又業平ハ杜乃の祝乃の業隆(正面ノムク)

の現化乃ハ濃乃く私乃法云
ゝ乃よしの皆法乃如乃ハ
ハ乃事とも衣の恵(ワキノムク)仏果乃
縁をそ乃ふ(ヲ)ヲ芝ハ東(正面ノムク)
奇特ある心しき非情乃草木
に迄とかつを法乃恵(シテ)仏事と
るとや業乃の昔男ハ衣の
ゝ(ヲ)ヲ多祝衣の業隆

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

れ　ニテ　備か宮を業すの　ヲ　東北
宮光の都と出く　ニテ　ワキへムク　善く海原を
ヲ　利生の　ニテ　二足ツメル　道て　ニテ　正面ムク返シサシ　ニテ　くるくる
出ヒラキ　きぬるゆら衣〳〵きらや葉と　地次第ニテヨロヨロクツロギ
正面向　見るうら曇　ニテ　名も高こし海の
うらうのうら衣　ヲ　油をみやこに　ヲ出ヒラキイロへ
ニテカル　出さとや　ニテ上　イロへトメ大小ノ前ニテ小廻リ　左右メ手込手上テ諷
柳ゆるうらうい
いるまの　ヲ　ゆるにうてゐ　ニテ　雪しの宮井

志うの出志のしてかうの道芝の
時ゆもるく行ゆもおし　サシ　黄男
うね容して　ヲ　春の京春日の里
ふるまでそなるゆのり　ヲ　仁の
天皇のつかさよいもかしこし勅と
うまて大内の玉殿うや孫の
ゆうらし玉日の御代勅ぞしそ
ときもさしの冠をゆるふ　ニテ　君

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

の声この
服の事當時を例稀なる
うねうねうねと八十ぢそや
左世の中は一度は栄へ一度は
をとろふるのまつをうたふ
月のめぐみもこゝろもすく
赤はるに行雲のいそや
海うらにそろはをそそいとしく

ゐます方は高しまだうらやしくまへ
ふ治定を歩行の杖も信濃路
あきまの嶽もやくもの煙
みよ春日
ねこを出るみな
ふ漢日の嶽かうけの
人のこゝろのぬてくろとさし指
もろくの指ろもこのゆふ着
しゃい袖をあゆふ八てしの

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

扇ヲ引カシ右ニ持左ヲ引右ノ方出ヲキ向太ノ前ヘ行
如何ならん心せのそのお姉人遥く
きのふの夢ぞあきつやまとのう
らん（トシテ）花前ニ蝶まふ絵こそ
雪也（扇ヲ左ニクツロキ舞ニカル）柳上に学ぶその舞こそ金
（上ノ扇）柱立しもやしの笹のこの手にも
大左右（歩込ヒラキ）いろこそ壮むらし成ぬく
（サシ出シ角トリ）名乗すろ（トシテ）昔男のあとこ
（中ニテ正面ヘヒラキ又始ノ子ニツヲニ正ヘ歩込ヒラキ下ヘヨシ）（左ヘサシ）（身ヲナヲス）
めて花ものちの春のうつり

つふあやめのころの（左ヘ）いろ
（正面ヘ出）いつも似ずや似ずや杜若の花
あやめこそ（サシ出シヒラキ）ねよるふ（トシテ）蝉の
（見面ヘ）（左ノ袖ヲヘシ）（左ヘサシ）うら衣の神白妙のうの花は（右ニテサシ）
（右ヘマワリ）雪の春も（東ノ方ヘ雲ノ扇ヲヒラキ）きらくぐしくるふ東
（正面ヘヒラキサキヘ出）
きのあきもくさの杜名残花
（ユウケンノ）（ワキヘ向ク）もさうの心ひらけてもとや
今こそ春出生（サシ右ヘマワリ）をかやいま

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

杜若

げにや業平ハ極楽乃歌舞の菩薩
乃現化なれバ讀をく和歌乃
ことばまでも皆法身説法乃妙文
なれバ草木迄も露の恵乃佛果
乃縁をとふらふなり 杜若の
心だにき非情の精乃草木よ
詞とかいま法乃色 佛果をとげて
や業平の昔男乃舞のすがた
是ぞ則歌舞乃菩薩ハ 仮に衆
生と業平の 本地寂光の都を
出て 普く済度 利生の衆
生 ならくさわるかも衆をすくふや舞楽と
かおもふ世 おもひの法乃ちとそ

衣 袖と妻とをさすや 抑此物
語ハいかなる人の何事によつて思ひ
乃露乃信夫の山忍びて通ふ道芝
乃始めもなく終りもなし 昔
男うゐ冠して奈良の京春日の里
にしるよしして狩にいにけり 仁明
天皇の御宇かとよいともかしこき勅
をうけて大内山乃春霞立や弥生
乃初めつかた春日の祭の勅使として
すきびたひ乃冠をゆるさる 君
恵乃ふかき故殿上にての元服の事
当時其例稀なる故に初冠と
ハ申すや 然るに世の中乃ごと

井筒

舞附

是ハ扇ヲ持出ルノ口ザナリ是ハ一通リノ業ナリ

向リ扇きとの肩モテ次方ニテ出シテ柱ノ内ニテ左ノ足ニテトメ右ノ足フミカケ大小ノ方ヘ向キ左右左ト三足ツメ廻ルト謡出ス・地丸ニテ左ノ足右ヘフミカケ正ヘ右左ト足トメサガリきざみト謡出ス・松乃色のミ右引右ノ方ヘムキ・向の方よリ左右左ト右ノ方ヘ出足トメ・返シニ左引正

いざ井を汲ひあま衣水ニて見なる塚よ亡向の亀ノ水ニ浮ぬる人ぞ業平ハ世よ名をとめ一人ありさ(正)れハ千歳の昔も是成塚の陰なんわれもあくまでそれ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

たゝやその里よりある人ありて二
道の思ひて通ひ給ひしよ（下女）
ふきいれこの白波立田山（月）あはに
や君う獨ゐらんとおぼつかみ
乃うるの道行塩を思ふ心こまて
よその髪りいまくるう（下カ）宮
情ろるこかこの衣をうく
そ理（ワキ）うかり（ワキ二行初）むり（ワキ二行初ソヘ下）世間よ住
人の有きるか宿をおう冬く門
乃前ねてよりてうおひこの
おこうかこひてたいみ最を
水鏡面（ワキ）をかく袖をいかも忘（ワキ二行初）乃
ろも庭ねかくうる月日を

重かりてねこかおくうかも
しくおよ今いかゝ君の其ゐ彼
まゝ男文集の露乃玉章の心（ワキ）
乃花もそひて（上ヨ正）つ井筒
ねつてよかましまゐりたき君
あるしかいそ又さるはゝ（ワキ）讀
て賜りまる程ねさ時かそく
らへらしうわを聲もかた
こゝ君ねかしして我うあく
きてたりひよ讀し放かれやつ
は井筒の女（ワキ）きこえしハ有
常が娘乃古き名なるをし
（上ヨ二行初正）ゑやふりしの陰岁ハ妙なる

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

有信のあやしや名乗れしまた
誠は我を恋ふるぞ紀乃有常う
浪もいさ白波の立田山よりみ
給まて参りたるよ
伝を聞田山みまほしき紀乃有常の
紀乃有常か娘とも
乃かよふ
ゆふやおの縄乃かよひ
とりつなぎ行
そうし
あこうれきり
や在原寺乃うら乃月〳〵
をうたれ衣手よ夢ばかりうてうち
松苔乃むしろ

き　ヒダリテサケ　若ゐき　ヒラキ

るりや　ハルカ向ノ行　はるゝゝえ

角ニテガシラ左足ヨリ　右足ヨリヨリスグニ　文句ノ下度ニユクハ右ヨリ　作物ノハハユク　女ハヒダリニ

スラリト作物ノキハ　ユヨリ足ノトドメ　男成きり葉牟乃面影　トメノル足ヨリサソウ　トドメ　トメル足右ヨリ二足ノメ　トドメ　これハ

かつらや　ヒニテヒルム　我かうなつりや　ヒダリナガラ二足スカリ　トヨスクニ左ヘモリ

千下ゲ　七帰りくまし、乃海おうめる　正ヘヨシ出右ノ足二足ニテミ出シタノ油正面ノ巻返シ息ニテル様ニシナガラ左ノ足ヲスミ出シ　立ツシン右ムキ

乃色匂ひて　ムキ下ミ足シなゝめニサシ出ス左ノ手ヲ内ニヨセテ　ヨコメテシテトドニル　左ノ足

寺乃鐘もほのぐ〳〵と　シテ狂ノ方見ヨキウケ　ナカラシテ狂ノ方ヘユキ

寺の松風やまをゝの夢さまし彼

すてく眼あきり　太ツミノ外上ニシヨニ　勢ノ足ヲ上ニ

にぐるま

又

●ヨリモ松まで正ヘヒラキ左ノ袖ヲカヘスルヲカヘサズニ両手ヲ　ニ乱ガテ自然ニトルフニバタリト両手ヲサゲ夫ヨリニ右ヲケニ　足ツメ入ル

●舞三段ヲシ右ノ袖ニキ込方ヨシカブラズ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

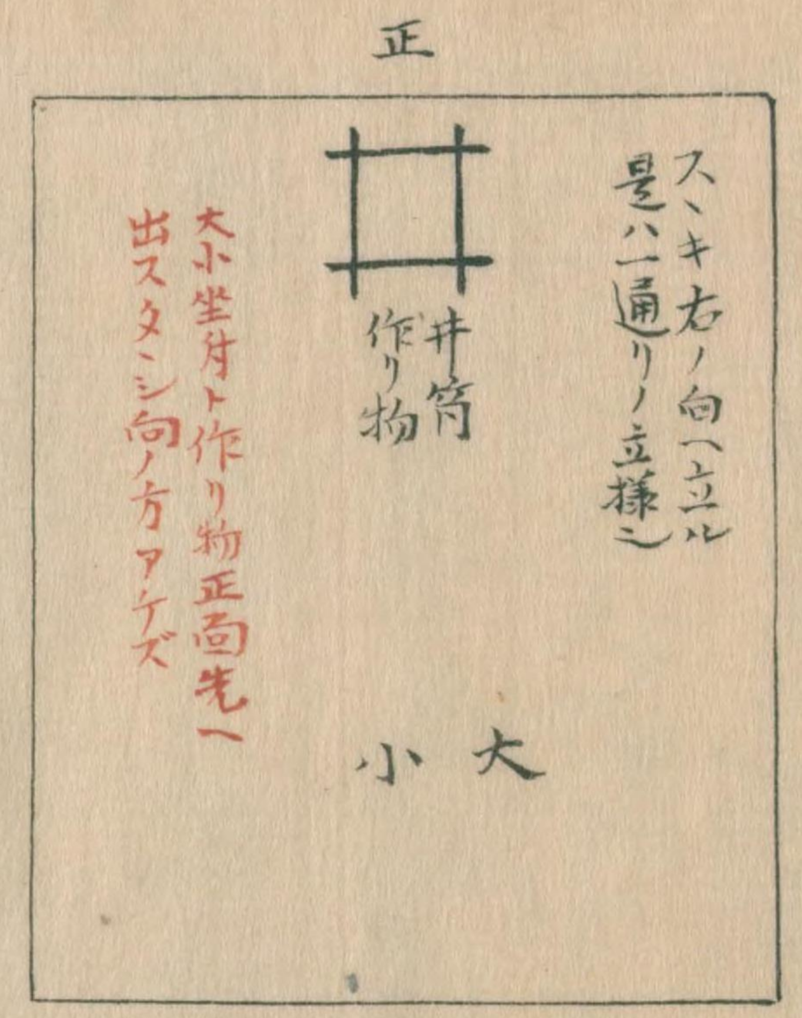
井筒

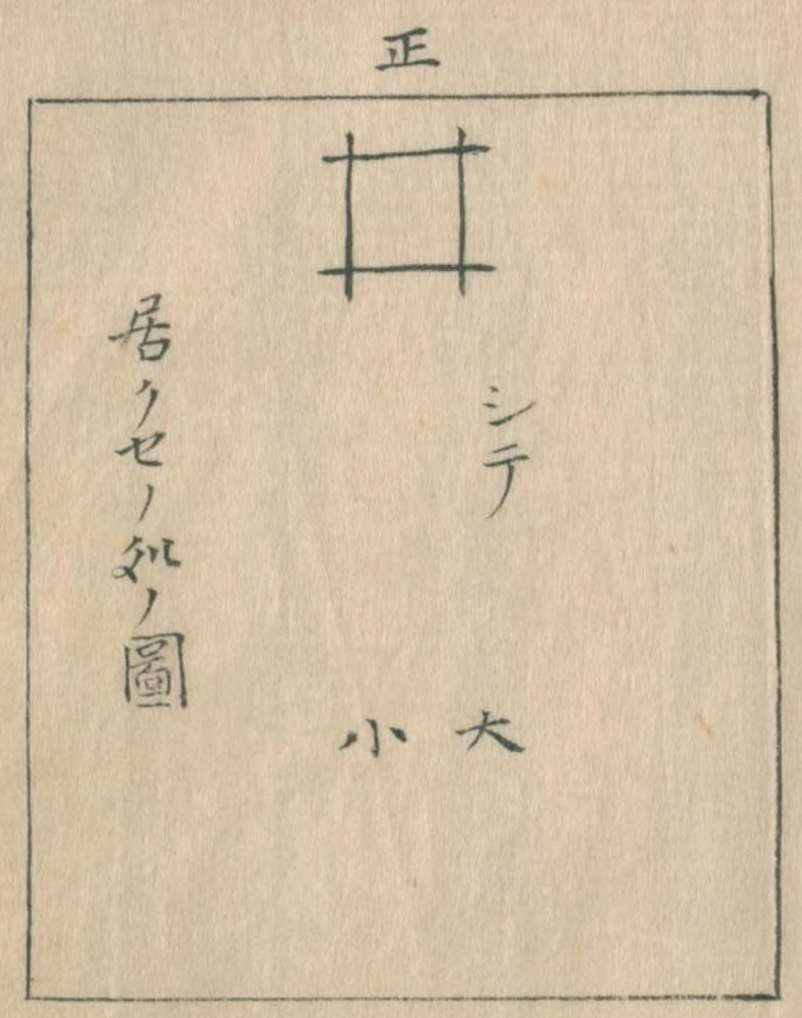
装束之覚

初面 小面 深イ 之内　かつら　同帯　若女縫箔　唐織　扇ニテモ 珠数ニテモ

後面 同断　かつら　同帯　若女縫箔　摺箔縫箔

摺帯　冠追かけ　長絹　扇





又 扇系る葉や疋ぬ由九近ヤ上ル
寺井ふもめるト中左右ニテ一通リノワザニテ・女とも見ヘバワキヘナヨト
ムキ・男ト井ノソバヘヨリ・ありまりト右ノ手ノ扇ニテ左ノヒザヤニ一
ルヤフニメ下ニ居左ノヒザ立右ノヒザツキ・業平ヒザカヽヘナヤラ少シ
身ヲノバシ井ノ内トクト見・あつくしややノ引ニ右ノ手ハナシナヨト正
ヘ直スヂキニ左ニテシホリナヤラ立ニ三足下リ左リ廻リ
・木ノ葉ニテモ水タゴニテモ持出ル水タゴ持テモ木ノ葉ヲ持テモ何レ
ニテモ右ニハ扇ヲ珠数ヲ持出ル
井筒半靏子ニハ余リ不仕ル御好ミナクハ格別先ハ半靏子ニハ不致由市十郎ト云ル

替業

コヽニテ下上ノ扇ニテ水ニ付キ寺井ト
作リ物ノキハニ至キトクト井ノ中見
寺井に澄る月ぞさやけき〳〵 下 月やあらぬ春
作リ物ニ立テ居ナガラ面直シ正面向キヨル
や昔と詠めしもいつの比ぞや筒井筒〳〵 井筒
又作リ物ノ内見
井筒にかけし 上 まろがたけ 地 生ひにけらしな 上 老
にけるぞや 地 さながら見えし昔男の冠直衣
男ト井ノリバヘヨリ右ノ手ノ扇ニテ左ヘヒザヤヱヤフニテ下ニ居左ノヒザ立右ノヒザツキ
ヒザナヤヘナガラ少シ身ヲノバシ井ノ内トクト見
しハ女とも見えず男なりけり業平の
ヤノ引ニ右ノ手ハナシナヨト正ヘ直スヾキニ左ニテシホリナガラ二三足下リ右廻リ
左ノ手 下ケ
面影 下 見ればなつかしや 同 我ながらなつかしや亡婦
大小ノ前ヨリ二三足出
右ノ足一足フミ出シ左ノ手巻込マズ少シ右ノ方ヘ下タニ居惣身ツボミタルヤフニノ手足共ニ内ヘヲサメ左ノヒザ立右ノヒザツキ
魄霊の姿ハしぼめる花の色無うて匂
立右ヘ向キ気ヲノバシ
正面シカト見
左ヘ顔カタムケ キクゴヽロ
右ヘノリ込
ひ残りて在原の寺の鐘もほのぼのと明
東ノ方ヘ向キ扇巻込 左ノ肩ニアテ
サシ廻シ右廻リ
シテ柱ヘ向キ右ウケナガラシテ柱ノキハニテ左リヘノリ込
くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も
正ヘヒラキ
左ノ袖カヘシ
右左ト二足ツメ
破れて覚めにけり夢ハ破れ明けにけり

又

スラ〳〵ト作リ物ノキハヘヨリ足フミトメ
トメタル足ヨリ井ノ内ヲ見ナガラ二足ツメナガラサシ廻ス様ニシテ右ノ手ニテスヽキノケ井ノ内見ル
おとこなりけり業平の面かげ
トクト井ノ内見ル
シホリナガラ二三足下リ右廻リ
此時ハスヽキ手前ノ右ノ方ニ立ツベシ
見ればなつかしや

舞附

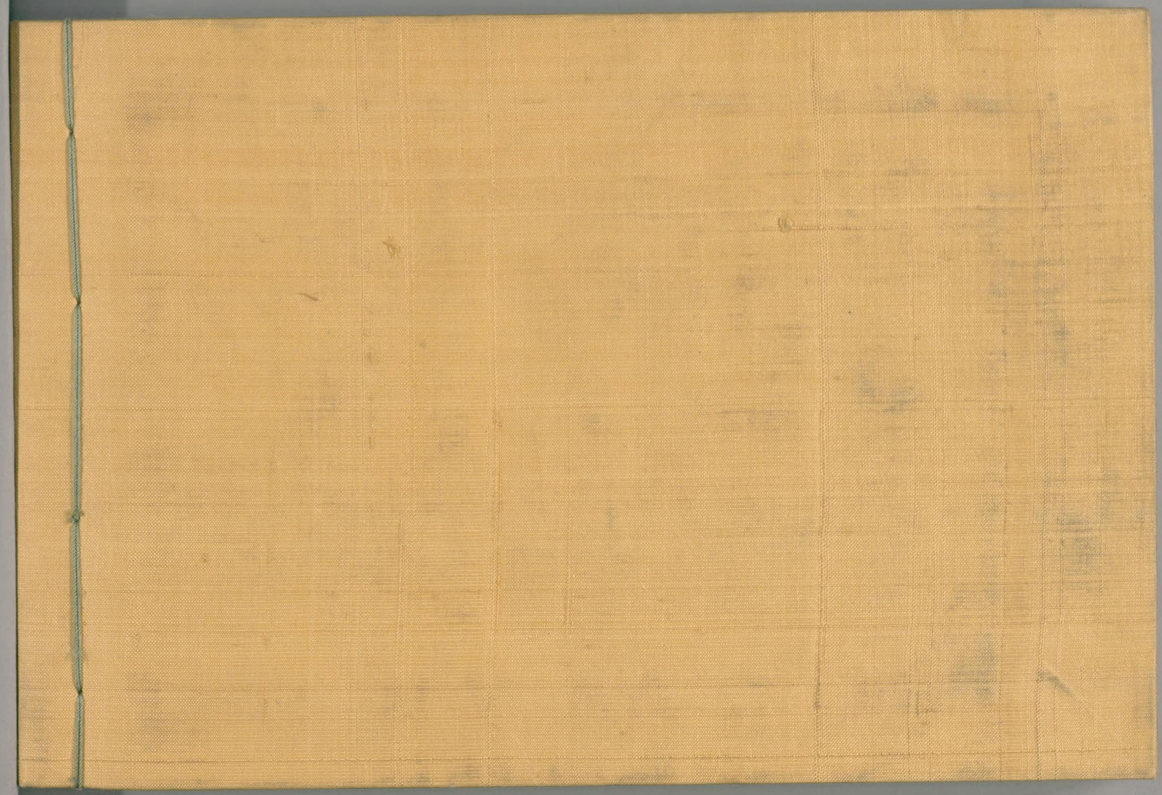
是ハ扇ヲ持出ルノ業ナリ是ハ一通リノ業ナリ

暁ごとの 扇モチ次第ニテ出シテ柱ノ内ニテ左ノ足ニテトメ右ノ足フミカケ大小ノ方ヘ向キ左右左ト三足ツメ暁ごとト謡出ス・地取ニテ左ノ足右ヘフミカケ正ヘ右左ト足トメさなきだにと謡出・松の戸のこ右引右ノ方ヘ向キ・何ぞ音より左右左ト右ノ方ヘ出足トメ・返シニ左引正

いさ井を結ひあげ花水としこれ
なる塚に回向の気色見え給ふハ
いかなる人にてましまし候ぞ
ニテ向
ワキへ
是ハこのあたりに住者也此寺乃本願
在原乃業平ハ世に名をとゞめし人
正
なりされハ其跡のしるしも是成塚
ワキへ
の陰やらんわらはもくハしくハしらず
さりながら花水を手向御跡を

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用